

# 木曾の怪物

——「日本妖怪実譚」より

岡本綺堂

青空文庫



これは亡父の物語。頃は去る明治二十三年の春三月、父は抛よんどころなき所用あつて信州軽井沢へ赴いて、凡およそ半月ばかりも此しゆくの駅に逗留していた。東京では新暦の雛の節句、梅も大方は散ちりつ尽くした頃であるが、名にし負う信濃路は二月の末から降ふりつづく大雪で宿屋より外へは一ひと歩も踏出されぬ位、日々炉を囲んで春の寒さに顫ふるえていると、ある日の夕ぐれ、山の猟師が一匹、鹿の鮮血滴なまぢるのを担いで来て、何どうか買あつて呉れという。ソコで其の片股かたももだけ買う事に決めて、相当の価あたいを払い、若も暇ならば遊びに來いと云うと、田舎漢いなかもの正直、其の夜再び出直して來た。此方こつちも雪に降籠められて退屈の折柄、其の猟師と炉を囲んで四方山の談話はなしに

時を移すと、獵師曰く、私は何十年來この商売を為していますが、この信州の山奥では時々不思議な事があります、私共の仲間では此れを一口に『怪物』と云いまして、猿の所為とも云い、木霊だまとも云い、魔とも云い、その正体は何だか解りませんが、兎にかく怪しい魔物が住んでいるに相違ありません。と、冒頭まくらを置いて語り出したのが、即ち次の物語だ。因ちなみに記す、右の獵師は年ころ五十前後で、いかにも朴訥で律儀らしく、決して嘘などを吐くような男でない。

昔からのお噺はなしをすれば種々いろいろあるが、先ず近い所では現に三四年前、私が二人の仲間と一所に木曾の山奥へ鳥撃に出かけた事がある。そういう時には、一日は勿論、二日三日も山中を迷い歩く

事があるから、用心の為に米または味噌、鍋釜の類まで担いで行く。で、日の暮れかかる頃、山奥の大樹の蔭に休んで、ここに釜を据え、有<sup>ありあ</sup>合<sup>あ</sup>う枯枝や落葉を拾って釜の下を焚付け、三人寄って夕飯の支度をしている中、一人が枯枝を拾う為に背後<sup>うしろ</sup>の木かげへ分入<sup>わけい</sup>ると、ここに大きな池があつて、三羽の鴨が岸の浅瀬に降りている。這奴<sup>こいつ</sup>、幸いの獲物、此方<sup>こつち</sup>が三人に鳥が三羽、丁度お誂え向だと喜んで、忍び足で其の傍<sup>そば</sup>へ寄ると、鴨は人を見て飛ばず驚かず、徐<sup>しず</sup>かに二足ばかり歩いて又立止<sup>たちどま</sup>る、この畜生めと又追縄ると、鴨は又もや二足ばかり歩む、歩めば追い、追えば歩み、二三間<sup>げん</sup>ばかりも釣られて行く時、他の一人が此<sup>こ</sup>の体<sup>てい</sup>を見て、オイオイ止せよせ、例の怪物<sup>えてももの</sup>に相違ねえよと、声をかける。成程と心

付いて其のまま引返して、私に其の嘯をするから、ハテ不思議だど三人一所に、再び其の木かげへ往つて見ると、エエ何の事だ、鴨は扱さていて、第一に其の池もない、扱なおよはいよいよ怪物の所為しわざだと、猶能なおよくよく四辺あたりを見ると、其の辺は一面の枯草に埋つていて、三間ばかり先は切ツ立たての崖になつていたので、三人は思わず悸然ぎよつとして、若もしもウカウカと鴨に釣られて往こうものなら、此の崖から逆落しに滑り落ちるに相違なく、仮たとえ生命に別条ないとしても、屹きつと大怪我をする所だ、アア危いと顔を見合せて、旧もとの処へ引返すと、釜の下は炎々と燃上もえあがつて、今にも噴飛ふきとばしように釜の蓋がガタガタ跳おどっている。ヤア飯が焦げるぞと、私が慌てて其の釜の蓋を取ると、中から湯気が真白に噴上げる、其の煙の中に大き

な真青な人間ひとの顔がありありと現われたから、コリヤ大変だいいよ怪物だと、一生懸命に釜の蓋を上から押えて、畜生、畜生ッ、オイ早く鉄砲を撃てと怒鳴る。他の二人も心得て、何処あてを的ともなしにドンドン鉄砲を撃つこと二三発、それから再び釜を覗いて見るとモウ何物なんにも見えない。

山又山の奥わけいふかく分入ると、斯こういう不思議が毎々あるので、忌々しいから何どうかして其の正体を見とどけて、一番退治して遣ろうと、仲間の者とも平つねづね生申合せているけれども、今に其の怪物の姿を見現わした者がいないのは残念です。モウ一つ不思議なのは、これも二三年前の事、私が木曾の山ふもとじの麓路を通ると、商あきん人らしい風俗の旦那と手代二人が、木かげに立って珍らしそう

に山を見あげているから、モシモシ何を御覧なさると近寄つて尋ねると、旦那らしい人が山の上を指さして、アレ御覧なさい、アノ坊さんの担いでいる毛鑷けぬきの大きい事、実に珍らしいと云う。ハテ可怪おかしな事をいうと思ひながら、指さす方を見あげたが、私の眼には何物なんにも見えない。扱は例の怪物だと悟つたから、この畜生めツと直ぐに鉄砲を向けると、其の人は慌てて私の手を捉え、アモシ飛とんだ事を為さる、アノ坊さんに怪我さでも為せては大変ですと、無理に抑留ひきとめる。で、其の人の云うには、私は上田の鉄物かなもの商兼研職やとぎやで、商売用の為め今日ここを通ると、アノ坊さんが大きな毛鑷ひっかつを引担いで山路やまみちを登つて行く、私も親の代から此の商売をしてるが、あんなに大きな毛鑷を見た事がないから、奉公



人も私も肝<sup>きも</sup>を潰して見ている所だとの事。併<sup>しか</sup>しそんな事のある筈もなく、私の眼<sup>わし</sup>には一向見えないのが第一の証拠、あれは例の怪物に相違ないと、委<sup>くわ</sup>しく云つて聞かせると、其の人達も驚いた様子で、成程そう云えばモウ其の坊主の姿は見えなくなったと云う。何しろ憎い畜生め、今日こそは退治て呉れようと、鉄砲を小脇に其の山路を一散に駈<sup>かけ</sup>あがり、其処かここかと詮議したけれども、別に怪しい物の姿も見えないからアア残念ナと再び麓へ降りて来ると、彼<sup>か</sup>の商人はモウ立去つたと見えて、其処には誰も居ない。で、其の商人は本当の人間で、全く怪物に化<sup>ば</sup>されたものか、但しは其の商人が怪物で、私に無駄骨を折らせたものか、何方<sup>どっち</sup>が何<sup>ど</sup>うとも今に分らぬけれども、何方にしても不思議な事で、私も

流石に薄気味が悪くなって、その日は其のまま帰ってしまつたが、私ばかりでなく、仲間の者も折々に斯ういう目に遭いますから、山へ出る時には用心を為しにやありません、云云。  
(麴生)

(「文芸倶楽部」明治三十五年七月号掲載「日本妖怪実譚」より)

# 青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣」岡本綺堂妖術伝奇集」学研M文庫、学習研究社

2002（平成14）年3月29日初版発行

底本の親本：「文芸倶楽部 日本妖怪実譚」

1902（明治35）年7月

初出：「文芸倶楽部 日本妖怪実譚」

1902（明治35）年7月

※初出時の署名は「麴生」です。

※表題は底本では、「木曾の怪物《えてもの》」となっています。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2008年9月23日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 木曽の怪物

——「日本妖怪実譚」より

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>